

竹宮辰

『いつ頃くるの?』

『今終わったところ』

ゼミが終わってスマホを見ると彼女のみうから三十分前にメッセージが届いていた。

『まってるね、食堂だよ』

すぐに返事が来た。僕の彼女は、今日も同好会のみんなと集まっている。会と言ってもたった五人で、メンバーは同じ大学の同じゲームが好きで趣味の集まりだ。週に何度か、空き教室や学内の休憩スペースで駄弁っている。僕もみうも友達の少ない性質なので、話せる相手が集まっている場所は好きだ。しかし、僕は生まれて初めてできた恋人と友達とのことで困っている。

二時過ぎの食堂は昼飯時に比べてすっきり人が減っていて、すぐに彼らを見つけたことができた。だいたいが盛り上がっているようで、開けた席なこともあり、近く前から話し声が聞こえる。男女の笑い声が重なる。その二つ奥のテーブルにたまたま座っている女子がチラチラそちらに目を遣りながら一人で遅い昼食を摂っている。きつと、男子の中ではしゃいでいるみうが気になるのだろう。彼らは距離が近すぎるのだ。僕はなんとなく恥ずかしさを感じつつ彼らのいる方へ向かった。

「飯山、また重くなってるない?」

「こはん食べた後だからだよ、誤差!」

みうは田辺の指摘にわざとらしい怒り方をしている。白くむつくりとした指がひよるがりの田辺の薄い耳を掴み、強く横に引っ張った。田辺は痛つて、と大声を出す。二人のやりとりで他の二人も笑う。僕は軽く挨拶をして、みうと田辺の隣に座った。

「亮、おつかれ!」

みうはにっこり笑うと田辺の膝の上から降りて僕の膝に腰を下ろした。彼女は椅子が硬くて嫌だと言って他人の膝の上に好んで腰掛ける。初めてカラオケでデートした時から、僕の膝はみうの椅子だ。しかし、お気に入りの椅子がないときは仕方なく他に腰掛ける。五つの椅子がここには並んでいる。

「やっぱり亮が座り心地いい、田辺は痩せすぎ」

「じゃ、俺は俺は? 超クッション性あるよ」

「小川くんは太ってるから、そろそろ暑い!」

「お前がそれ言うのかよ」

デブの小川は顔の肉を震わせて笑う。彼は汗っかきで、今も額に前髪が張り付いている。僕は高評価を下してくれたことに満足して、腿の上ののっかった、まるまるとしたみうの肉を意識した。いつもの重さ、いつもの柔らかさ。ズボンの生地越しに肌のぬくもりが伝わるが、田辺の尻の温度でもあることを思うと少し気味が悪くなった。

「ねえ、亮には言ったんだけど爪塗ったんだ」

「ふーん」

みうは僕の膝に乗ったまま上体を傾け、対面に右手を伸ばした。透き通ったプラスチックのような質感のマニキュアを昨日塗ったばかりだ。

「へえ、ピンクか」

向かいに座る葉山がみうの手のひらを両手で包む。

「お前、爪伸ばしすぎなんだよ」

田辺が文句を言いながら左手を取る。田辺は空いている方の手でまだ赤い耳をさすった。みうの爪の色よりも彼の耳の方が濃い桃色で、くい込んだ爪の形が三日月のように残っている。二人とも彼女の指先をしばらくじつと見つめ、そのまま手を放すことなく会話は続いた。僕

はみうの頭越しにみんなの話を聞く。このシャンプーの匂いも嗅ぎなれたものだ。たぶん、ここに居る皆もこの甘い花の香りに慣れただろう。本当に、彼女はこのメンバー相手だとスキンシップを気にしなくなった。

最初のうちは、誰と話すにもおどおどして敬語だったのに、一年たった今では自分から積極的に接している。単にメンバーに慣れたというのもあるが、これは僕のせいでもある。付き合ったばかりの頃、一年生の夏だったのだが、お互いよそよそしさがなかなか抜けなかった。女子高出身ということもあって、男性慣れしていないのだろうと考え、みうをこの同好会に誘った。同じ学科の同級生だったが、彼女はサークルに所属していなかったのだ。もちろん、皆に初めての彼女を自慢したい気持ちもあった。その効果はてきめんで、見事に馴染んで、ふたりきりの時もスキンシップに抵抗がなくなった。付き合ってから一年と三ヶ月、みうが同好会に参加してからもまる一年が経とうとしている。

初めてここに呼んだ時、みうは肩のでた服を着ていた。黒いワンピースで、肉に埋まりかけの鎖骨の下に白いフリルがついていた。服はいつも彼女好みのかわいさが意識されていて、着ているものからは本人の内気さは感じられない。円い肩から伸びる腕に均等についた白い脂肪。太めだけれど腕は長くて、ちんちくりんな印象は受けにくい。肩から少し目線を下げると、フリルが乳の形に大きく盛り上がっていた。夏なのに腕も肩もほの白く、それにつづく服の下の皮膚もしっとりしたミルク色をしているのだと想像される。座ると腹の肉が少し目立ち、ふっくらとした下肢がびったりと二本揃う。エナメル黒い靴が、きゅつと全身のバランスを取っている。

「はじめまして、飯山です」

「よろしく、皆同い年だからタメ語でいいよ」

「じゃあ、よろしく」

ひとりひとりの自己紹介を聞きながら、みうは心底嬉しそうに笑った。大きな目と長い睫毛のおかげで、多少の脂肪がついたくらいでその顔立ちに傷がつくことはない。僕がみうのスタイルを気に入っているのは言うまでもないが、一番気に入っているのは、自らの豊かさに臆することのない彼女の心だった。人によつては太すぎと判断されるこの身体を、みうは気にすることはなかった。普通、豊かすぎる身体を持つ人は、この豊かさは自分の手に余ると言った様子で体型を卑下する。しかし、みうは鏡の前で、その豊かさを目前にしても臆することはない。かといって過度に自身の脂肪を肉体的魅力として鼻にかけることもない。身体と心が寄り添い合っている。みうはまるで絵画に描かれる類の豊満を手に行っている。僕はみうの人見知りをなくすことで、より深淵とした笑顔を長い時間見せて欲しいと考えて彼らに紹介したので、二人でいてもずっと笑い転げているとはならないのだし。みうはどんどん笑う回数が増えていった。

「飯山も小川も太った？」

「太ったのは小川くんだけでしょ！」

「でも、顔の肉もやばいよ、ほら」

葉山が骨ばった指でもってみうの豊かな頬肉をつまみ上げた。頬べたはもっちりとまんまるく、月見団子のよう。

「背中も肉のつてるね」

田辺が僕の腹とみうの背中の中に手をさしこんだ。

「ベーコン、ベーコン」

「ブロック肉！」

「もう！ 人間だってば！」

みうは怒ったふりをして彼らの頬を順番につねっていた。爪を立てるとぎゃつと悲鳴が上がり、その度に笑いが起きる。彼らは最近、みうのことを食肉に例えてからかっている。彼らの笑い声を聞いていると僕は心の底からじわじわ怒りが沸き上がってくるのだが、当の本人が一番笑っているのだからどうしようもない。彼女はそうしてネタにされることを非常に気に入っている。僕はそんな風に彼女をいじることが上手くできないものだから、周りに合わせてにやにやしているばかりだ。みうは二人きりであるときよりも良く笑う。目がぱちりと開いて鼻筋も通っていて、歯並びも良く、少し厚い潤った唇。太めではあるけれど、決して不細工ではない。この誰もがそれを知っている。

「みうは痩せたら美人じゃん」

「でも今はミニブタって感じ」

「そう？」

いつぶりだろうか、みうが少しだけ悲しそうな声を出したが、彼らはそれに気が付いていない。僕は慌てて言った。

「みうは今のままでいいんだよ」

皆は、一瞬間だけ静かになった。みうの表情は後ろからで分らない。しかし、そのすぐ後に皆の空気が和らいだ。きつと、みうが笑顔を見せたのだろうと僕は思った。

「中川はほんとデブ専だなあ」

田辺の冗談に僕はドツと湧いた。

「みうは本当、重いなあ」

僕の発言で皆もみうも笑った。ああ、いまや僕はこんなことを言ってしまうし、みうは満足げに微笑んでいる。こんなはずじゃあなかったんだけどな……。